

序 文



講道館の創立は1882年（明治15年）であつて、本年は90周年に当り、その記念式典が行はれる。講道館柔道科学研究会の紀要第4輯が、この記念すべき年に、上梓されることは、まことに喜ばしい。世界のスポーツの祭典とも言ふべきオリンピックの競技が西独ミュンヘンで今年8月に行はれたが、柔道がオリンピックに参加したのは1964年の東京オリンピックが始めてであつた。メキシコシティの第19回には参加しなかつたが、本年のミュンヘンの第20回大会には6人の選手が出場した。海外におけるオリンピック大

会への日本の初参加として、日本柔道界にとっては記憶すべき年であつた。柔道は現在世界の人々の愛好するスポーツとして国際的にも高く評価されてゐるが、講道館柔道の本質は、その創始者嘉納治五郎の述べてゐる如く、人間完成の道であつて、単に勝ち負けを争ふ、一般スポーツにくらべて、その理想に於て、また基盤においてより高くまたより深い目的を志向してゐる。周知の如く柔道は、日本古来から行はれてゐた柔術から生れたものであるが、治五郎が若い頃柔術を学び会得し發明したことは、新しき時代の柔術の在り方を、体育としての完全なる組織に作りかへることであつた。その考へに基いて大きな改革を行ひ、安全性についても十分留意されたが、その結果現在の講道館柔道は、スポーツとして世界的に普及發展して行つたのである。治五郎が講道館に、早くから柔道医事研究会を設置したのも、柔道が体育として、医学的に十分な研究の必要があることを痛感したためであつた。その第1回の会合は、1932年2月（昭和7年）に一ツ橋の学生会館で行はれた。その折の研究題目としてとり上げられたものには、發育期にある者に対する柔道指導の医学的考察、各技についての骨、筋力の力学、絞めの落ちと活法の医学的研究、当身法の医学的力学的心理学的研究、女子柔道の医学的考察等が挙げられてゐるが、その会合には9人の学界の権威が出席されてゐる。しかし現存の方は東龍太郎博士と山田康博士の御二人であることを考へると、柔道医事研究会発足後の40年の長い歳月が偲ばれる。

柔道医事研究会が、柔道科学研究会と改められたのは、1948年9月（昭和23年）であるが、それ以後今日まで御尽力下された会員の中で、浦本政三郎、斎藤一男、杉本良一の三博士も他界され、本年1月には研究会の中心となつて御指導下さつた猪飼道夫博士も逝去された。

今、研究会の歴史を省みて、残念なことは、戦災等のため、往事の尊い研究資料が大方散佚したことである。私は会員の心血をそそがれた研究を保存するため、1958年（昭和33年）に紀要の編纂を考へ、今日まで4冊を上梓し得たが、特に海外の研究者の便宜を考へ英語の訳文を付する事とした。第4輯を出版するに当り、往事を偲んでの私の感想を記し、序にかへる次第である。最後に本紀要に御寄稿の諸賢の、講道館に対する御高配に対して、心から御礼を申し上げるものである。

1972年11月

講道館長 嘉納履正